

『生政治の誕生』

第九講 1979年3月14日 アメリカ新自由主義

■ アメリカの新自由主義について

以下の三つの敵対物によって構成され、以下に反対するものとして形成・発達した。

- 要素1. ケインズ政策
  - ニューディールが存在とニューディールに対する批判
- 要素2. 戦争をめぐる社会契約
  - ハヴァリッジ計画(戦争契約)
  - 社会契約において(戦争を行うこと、殺されに行くことを要求されていた人々そのものに対し)ある種のタイプの経済組織、社会組織によって、保障(雇用・病や不測の事態、年金)を与えることを約束
- 要素3. 経済的かつ社会的なプログラムを通じての連邦行政の増大
  - トルーマン政府からジョンソン政府に至るまでにアメリカで発達した貧困、教育、差別に関するプログラムのすべて

→ フランスにおいて見出される背景と同じタイプだが…

■ ヨーロッパ式新自由主義とアメリカ式新自由主義の違い (p267, L14-)

① アメリカは自由主義の要請でそもそも創設された国家である

- ・ アメリカ自由主義は、既存の国家理性に対しそれを緩和する原理として姿を現したのではない。
- ・ 自由主義タイプの要求、それも本質的に経済的な要求こそが、アメリカ独立形成の歴史的出発点であった。

② アメリカ自由主義はあらゆる政治的議論の核心

- ・ 自由主義の問題は、アメリカにおける議論およびあらゆる政治的選択において繰り返し現れる要素
- ・ 対してヨーロッパ 19 世紀の政治的議論において繰り返し現れたのは、国民の統一性、その独立、法治国家であった

③ 自由主義的基盤を持つアメリカにおいて、右派左派問わず、非自由主義(介入主義的政策)は脅威とみなされた

- ・ 非自由主義(介入主義政策)
    - 社会化の諸目標を導入しようとする → 右派が、自由主義的伝統の名のもとに批判
    - 帝国主義的かつ軍国主義的国家の基盤を内部に築こうとするもの → 左派が批判
- アメリカにおいて新自由主義は、右派においても左派においても活用され、再活性化された

➤ アメリカ自由主義は、フランスやドイツと異なり、ただ単に統治者たちによってもしくは統治の場において形成され定式化された経済的かつ政治的な一つの選択ではない。

➤ アメリカにおいて、自由主義は、存在し思考する一つのやり方

仏・独	● 統治者による被統治者に対する技術 個々人と国家のあいだの係争は、義務や公役務の問題をめぐる
米	● 統治者と被統治者とのあいだの一つのタイプの関係 個々人と統治とのあいだの係争は、自由の問題をめぐる対立 経済と社会についての一つの分析格子、思考法のようなもの

ハイエクもまた、一つの思考法として自由主義を語った。

「我々の役目は、自由主義を統治の技術的代案として提示することよりもむしろ、自由主義的ユートピアをつくること、自由主義の様態にもとづいて思考することなのだ。」

## ■ アメリカ新自由主義の考え方の特徴 (P269, L18-)

### 特徴1. 人的資本理論

フォーコー>二つのプロセスを表している点で興味深い

- ① 未探査であった領域における経済分析の前進
- ② これまで経済的ならざるものとみなされることのできていた領域を厳密に経済的な観点からまるごと再解釈することが可能になる

### ● 「労働」をめぐる①、②の実践

- ・ 古典派政治経済学は、労働を労働時間という唯一の量的可変項によって捉え、労働のニュートラル化をしてきた。
- ・ 新自由主義者たちはこうした労働の分析を批判、労働を経済分野の領野に再導入
  - マルクスにおいては「具体的な労働は、労働力に変形され、時間によって測られ、市場に置かれて賃金として支払いを受けたものである」と批判。
  - 資本主義の論理は、労働に関してその力とその時間だけしか考慮に入れていない=労働の抽象化
  - 労働の抽象化は、資本主義的生産に関してつくられた経済理論によって生み出されている→この理論は引き継がれるべきではない。

以前の経済分析(アダム・スミス等)	新自由主義的分析
所与の社会構造の内部における生産のメカニズム、交換のメカニズム、消費の事実を、3つのメカニズムの相互干渉とともに研究	メカニズムの研究ではなく、置換可能な選択と呼ぶものの本性とその諸帰結に関する研究 希少資源を二者択一的な諸目的に対して割り当てるやり方についての研究

### ● 新自由主義者たちは、「労働」をどう分析することになったのか (P274, L7-)

「経済学、それは人間の行動様式に関する科学である。つまりそれは、諸目的と、互いに排他的な用途を持つ希少手段とのあいだの関係としての、人間の行動様式に関する科学である。」(ロビンズ)

- ・ 資本、投資、生産といった種類の事物やプロセスのあいだの関係のメカニズムの分析ではない
  - 労働は、たんに歯車として挿入されているだけであるものとしてしか扱われない
- ・ 個々人の活動の内的合理性、戦略的プログラムの分析
  - 労働する者自身によって実践され、活用され、合理化され、計算される経済的行いとして研究  
「この労働活動は、いったいどのような選択のシステム、どのような合理性のシステムに従うのだろうか？」  
→ 労働者の視点に身を置く  
→ 労働者を経済主体とする
  - 労働者が、労働力という形態における需要と供給の対象ではなく、能動的な経済主体となる  
一見、労働者が生き生きとした存在にも見えてくる気がするが、一方で、フォーコーが用いてきた「企業」という用語の意味合いに、なんとなく納得…。

### ● 実際の新自由主義者たちの「分析」(p275, L15-)

- ・ 労働の目的→賃金を得ること=所得 (賃金≠自らの労働力の売値)  
「資本による生産物あるいは収益が『所得』である。何らかのやり方で未来の所得の源泉でありうるもののすべては『資本』である(アーヴィング・フィッシャー)  
→ 賃金=資本による所得
- ・ 資本=ある人に対してしかじかの賃金を得ることを可能にするような、あらゆる身体的、心理的ファクターの総体
- 労働者の視点から、労働を経済学的に分解すると、  
労働=資本(適性、能力、機械)+所得(賃金の総体、賃金の流れ)

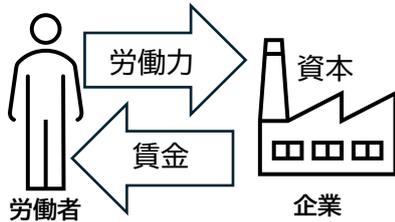
### ● 以上から導かれる帰結 (P276, L9-)

- ・ 賃金を可能にするものとして定義された資本は、事実上それを保持している者から分離することの不可能な資本となる

- 労働への適性、能力、何かをなしうる力…こうしたすべてを人から切り離すことはできない  
:労働者と一帯をなすものとしての能力という側面において、労働者はいわば一つの機械である。
  - 所得の流れを生じさせる機械
  - 耐用期間を持ち、旧式化したり老化したりする(単発的なやり方で売られるものではない)
 ⇔一つの企業に投資される資本に対し市場価格で売られるべきものとしての労働力

➤ 「能力資本」と考えるべきようなもの

- 多様な可変項に応じて、賃金所得を受け取る:労働者自身が、自分自身にとっての一種の企業として現れる



経済分析は、個人やプロセスやメカニズムよりもむしろ企業という要素をその読解基盤としなければならない…

- ドイツ新自由主義にも、フランス新自由主義のなかにも見られる要素

➤ 企業という単位から成る経済、社会こそが、自由主義に結びついた読解原理であり、自由主義による社会と経済の合理化のためのプログラム

自分が持っているいろいろな可能性(資本)をどう運用するかを考える、商品として希少性を持つ能力を自身に見出し、鍛え、投資するというありようは、「企業」的ということか。セルフ・プロデュース、セルフ・ブランディング…みんなその類のもの、と思うと少しゾッとする

■ 新自由主義は、ホモ・エコノミクスへの回帰なのか？ (P277, L17-)

古典的なホモ・エコノミクス	新自由主義におけるホモ・エコノミクス
交換のプロセスにおける二人の交換相手のうちの1人 ・ 有用性という観点から行動様式や振る舞い方が分析される ・ 必要の問題系にかかわるもの	交換相手のことではなく、自分自身の企業家のこと ・ 交換相手としてのホモ・エコノミクスを、自分自身の起業家としてのホモ・エコノミクスに絶えず置き換えることが、あらゆる分析で賭けられるもの

● ゲーリー・ベッカーにおける消費に関する理論

- 消費 = 交換のプロセスにおいていくつかの生産物を獲得するために購買を行い通貨の交換を行うことと考えるては決してならない。
- 消費する人間 = 消費する限りにおいて、「自分自身の満足」を生産する生産者であり、消費は企業活動のようなものとみなさなければならない。消費者でもあり生産者でもあるというあり方！
- 古典的な理論(消費する人と生産する人を区別して捉えることを前提とする)は、生産活動という観点からの新自由主義的な消費の分析との関係(消費する人と生産する人が区別されない)においては、効力を失う。
- 経済活動の分析格子としてのホモ・エコノミクスという考えの回帰はあるものの、考え方自体は完全に変化している

賃金	ある種の資本	資本をつくるもの
ある種の資本に対して割り当てられた報酬/所得	<b>人的資本</b> と呼ばれることになる資本 - 賃金をその所得とする能力機械は、その保持者としての個人から切り離すことはできない	これこそが新たに経済分析の対象となった！ <u>経済分析から完全に逃れていた諸要素(ここでは、労働)に関する経済分析が可能に。</u> (人的資本が構成され蓄積されるやり方の研究として)

## ■ 人的資本は何からできているのか (P279, L17-)

- ・ 人的資本は、<先天的諸要素>と<後天的諸要素>とからできている。

## ● 人的資本の先天的諸要素について

- ・ 遺伝的なものと先天的なもの:手に入れるために、基本的にコストはかからない
  - ・ 遺伝学を人口に対して適用することの現在の意義は、「リスクを背負った個人を識別すること」、「個人がその生涯を通じて冒すリスクのタイプを識別すること」
  - よい[遺伝学的装備]は、希少な何かとなりえ、経済的流通ないし経済学的計算の内部、二者択一的選択の内部に入ることができる
    - よい子孫を残したければ、よい遺伝学的装備/大きな資本を持っている配偶者を得なくてはならない。
    - よい配偶者を得るためには、<十分に労働し、十分な所得と社会的地位を得る>という自己投資が必要になる
  - 一つの社会が人的資本一般の改良という問題を提起することは、個々人の人的資本の管理、選り分け、改良が問題となったり要請されることになる
    - 遺伝学の使用をめぐる政治的問題は、人的資本の構成、増大、蓄積、改良といった観点から提起される:重要ではあるが、現在政治的に賭けられているものではない
- ナチスドイツが介入していたようなものとして理解してよいか。優生思想的な。

## ● 人的資本の後天的諸要素について (P282, L2-)

- ・ 個人の生を通じての意志的な人的資本の育成=所得を生産し所得によって報酬を与えられることになるその種的能力機械の育成:教育投資
  - 学校での学習や職業のための学習だけではない。
  - 両親が自分たちの子どものために割く時間(赤ちゃんと一緒に過ごした時間、愛情をかけた時間)
  - 与えられた世話
  - 両親の教養レベル
- 子どもによって受け取られる文化的刺激の総体すべてが、人的資本を育成し得る諸要素を構成する
- アメリカで言われるような子供の生に関する環境分析に到達
  - 人的資本への投資可能性という観点から子どもの生を測ることができるようになる。
- 健康保護にかかわる問題のすべて、公衆衛生にかかわる問題のすべてを人的資本を改良出来たりできなかったりする要素に関連付けて再考することになる。

## ■ 投資としての移住 (P283, L12-)

- ・ 移住にはコストがかかる
  - 移動に伴う費用
  - 新たな環境に身を落ち着けるまでの心理的コスト
  - その間得られない報酬
- そのコストは投資(地位の改善、報酬の改善などを得るという機能)でもある。
- 移住者は、ある種の改善を得るためにいくらかの投資を行うような自分自身の企業家として捉えられる
- 行動様式のすべてを、個人企業という観点、投資と所得から成る自分自身の企業という観点から分析することが可能に

## ■ 「革新」と呼ばれたものの再検討 (P284, L5-)

- ・ 利潤率の傾向的低下の要因は、帝国主義の現象に起因する(ローザ・ルクセンブルク)ものではない
- ・ 新たな技術の発見、新たな源泉や生産性の新たな形式の発見、新たな市場や新たな労働資源の発見に起因する(シュンペーター):革新性に起因
- 革新性は、ある種の資本による所得、人的資本による所得、人間そのもののレベルにおいて行われた投資の総体による所得に他ならない(新自由主義者たち)

- 革新の問題を人的資本についてのより一般的な理論の内部で取り上げなおし、経済成長著しい国(日本など)を古典は分析の可変項(大地、資本、労働者数と労働時間)では説明できない
- 人的資本はどのように組み立てられ、どのようなやり方で増大し、どのような部分において増大したのか、人的資本のうちに投資という資格で導入されたのはどのような諸要素であるのか、といった分析こそが必要

→ 経済成長政策の諸原則の抽出が可能に

- 物的資本の物質的投資から、あらゆる先進国の経済政策、社会政策、さらには文化政策、教育政策が人的資本への投資へと変容する
- 第三世界経済の始動の遅れも、経済メカニズムの停滞の問題という観点ではなく、人的資本への投資の不十分さという観点で理解される
- 16-17 世紀にかけての西洋経済の掲示的發展は、ほかならぬ人的資本の蓄積、その加速度的蓄積に起因したと歴史学者たちは新たな解釈の道へ

利潤率の傾向的低下とは、生産を通じて得られる所得が小さくなっていくという意味か？帝国主義の現象によるものという理解は、国家批判のインフレの文脈としても捉えられ得るか(前回の講義内容)。新たな製品が生まれたら、旧型の魅力が低下し、製品の売り上げとしても落ちるといふことでの利潤率の傾向的低下と理解したが、そうした革新性そのものが、資本で得られた所得そのものだという指摘…(あってるのか?)

## 感想

- ◇ 生きることをめぐる一挙手一投足が、自分自身に備わる資本を構成しうる投資行動になるという理解は、まさに、自由競争社会においては、「勝ち続ける」ことが目指され、競争することから降りることが許されないという指摘としっかり接続されていて、腑に落ちたが、衝撃がやはり強い。
- ◇ 「勝ち続ける」とは、希少性をどう生み出すか——選んでもらえるかどうか、という話でもある(?)。選んでもらえないのは悲しい、と感じる人は多いように思う。だから、選んでもらえるような投資の努力を脅迫的に迫られることとなり、投資することから脱落すると、「落伍者感」が半端ないものになってしまうように思う。でもそれは、新自由主義経済の世界に限った話でしかないはず。「自由」ではない自由競争社会に巻き込まれただけ」という意識が持てると、「降りる」ことへの抵抗も薄れるのかもしれない。
- ◇ 「努力すること」や「できるようになりたいと望むこと」は必ずしも「希少価値を持ちたい／所得に直結するもの」としたいという理由でなされるものではないと思うが、簡単に「売れる／売れない」、「将来性がある／ない」といった文脈での理解に回収されていってしまうように思う。でも、結局のところ、人間という生き物は、「もてたい」、「お金持ちになりたい」、「ちやほやされたい(必要とされたい)」、そういうものでしかない、と言われたら否定できないような気もする。それはそれでいいのか？希少価値をアピールすることなく、社会で役割が与えられるような、適材適所に収まるような、そういう交換市場は存在／成立するか？ほどほどに求められて、ほどほどにお金があって、ほどほどにヨシヨシされたら、たいていは満足できるような気もする。